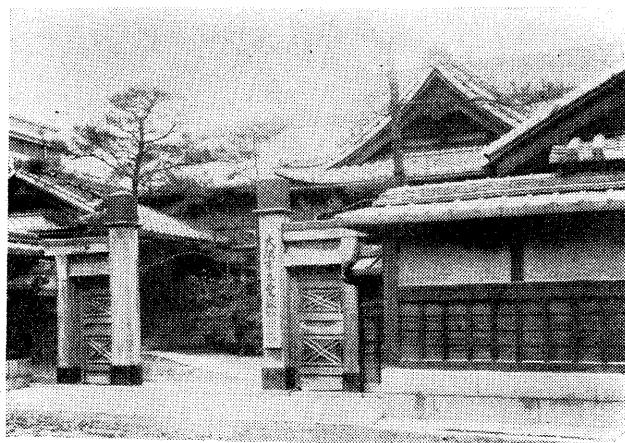


正門へ向つて右の松は、此の
年に植れたらし。

(大正七年当時)

愛珠幼稚園正門



人々を育てた人々

子道中村

愛珠幼稚園が、明治十三年六月一日に開園し、全国に先駆けて、公立幼稚園として発足した事や、当時の幼稚園教育に対する、この地方の社会的見解の実状については、昭和六年五月、東洋図書株式会社から出版された、今は既に故人となられた、慈父の如き倉橋惣三先生と、今も美しく健在である新庄よしこ先生の共著による、『日本幼稚園史』に、概略が掲載せられてあるから、此所では、過去七十五年の愛珠園史を育てた人々、及び関係者各位の、綿々として今もなお私達の前に輝かしく残されている真心について、お伝えしたいと思う。

明治維新後、我が国が、世界各国に亘して行くのに、あまりにも後れている文化を、どうして世界的水準迄に引上げようかと苦心したことは、よく明治史の物語つているところであつて、国を挙げて、唯一筋に、文明開化に努力し、國家百年の計として、当時世界各国にも数の少ない、義務教育の制度を敷いて、国民ことごとく就学の義務を持ったのであるが、この頃愛珠創設委員の豊田文三郎と滝山瑠の両氏は、街頭に遊ぶ幼児の教育についても、その必要を悟り、機の熟するを待つて、衆の讃同を得、漸く、愛珠幼稚園創設の喜びを得たのであつた。

此の喜びは、單に此の区内のみの幼稚園施設を得た喜びに止まらず、此の経験が範となつて、四圍にその設立を見るなれば、幼児の幸福は多大なものであつて、愛珠創設の意味は、一層深いものがあると、云つてゐる。

斯うした心持で起されたものであるから、園の經營には、細心の注意をもつてなされたのである。

愛珠と云う園名も、滝山氏の師事せられた藤沢南岳先生に依つて、袁士元の海棠の詩から撰び出された。同氏が、幼な子を思う心は、可憐な花と愛で、珠と慈しんでいる想いが、溢れてゐる。真に幼稚園は、天真爛漫、四季の花園に等しい。愛すべき海棠の詩を記して長く味いたいと思う。

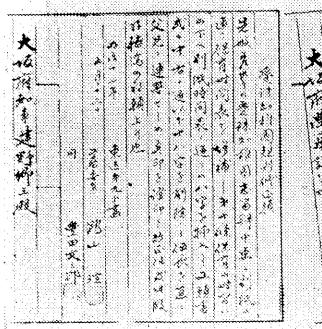
主人愛レ花如愛レ珠
春風庭院如画図
褰レ衣曲逕歩花影
翩々夜月飛長裾
海棠睡起春正美
花貌參差玉人似
主人吟賞夜不眠
直欲題詩壓蘇子

何事に依らず、事、教育に関するもので、新しく計画される時には、常に、お茶の水東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学の前身）の、附属幼稚園の監事であった小西信八先生に尋ね合せ、教えを乞つてから、実施されたのであつた。特に、開園準備の八ヶ月間は、委員をはじめ関係者一同は、非常に忙しい月日を過したが、同様小西先生にも随分御

迷惑をかけた事と思う。しかし、先生は、少しも厭うところなく、非常に熱心に、行屈いた指導を与えられた。施設の事、恩物の事、楽器の事、教育関係書類、其の他備品等、果ては責任ある主席保母の推薦に至る迄依頼しても、よくそれに応じられた。實に高徳な御仁であつたと追慕尊敬するものである。さればこそ、文明開化の未だ遠い明治初年に、開園式を挙げた本園の姿を見て、我子の誕生を見るように喜ばれたのであって、記念すべきこの慶びの日、よくそれに応じられた。實に高徳な御仁であつたと追慕尊敬するものである。さればこそ、文明開化の未だ遠い明治初年に、開園式を挙げた本園の姿を見て、我子の誕生を見るように喜ばれたのであって、記念すべきこの慶びの日、

次のような祝電を寄せられたのである。

サキガケテ、オドロカ
シケリ、ナニワウメ、
アツマノハギハ、ハル
シラヌカト。と、

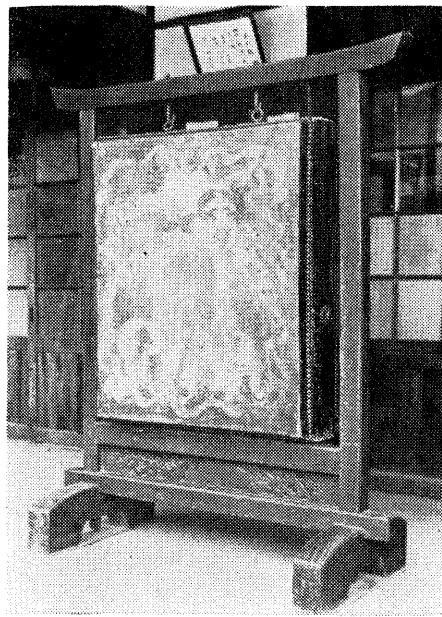


愛珠創設認可督願願書と規則修正願

愛珠は、全く小西先生の手によつて、誕生を助けられたのであるから、開園を非常に喜ばれた事は、当然の事と推察するが、これと共に此の恩恵は、永く忘るべきでない

事を印せられた。其の後も、園の生い立ちには、何かと心を遣われて、滝山・豊田の両氏に宛てた連絡の葉書が、数々残されている。

星移り時廻って、明治二十三年六月一日を迎えて、開園満十
年の記念祝賀式を挙げた。此の日は、大阪府知事夫妻をはじめ、數多著明の人士から祝辞祝電を受けたが、其の中の、小西先生から寄せられた祝電には、涙ぐまれて忘れがたいものがある。其の頃、先生は、既に、東京盲啞学校長に転じ、且つ社会事業にも、尽粹せられていたが、往時の劳苦を偲ばれ



角太鼓（自由遊戯、其他律動、劇遊び等の節に用いた。模様は童の漆彩色）

て、感慨深い想いがあつた事と、推察させられるのである。
"ナニワツニ、ヒラキシソノノ、ケフヲミテ、トトセムカ
シノ、イタツキヲシル" と。

又、同じ想に涙されたであろう滝山氏も、当日、幼児が齊唱する記念の歌を、次のように作られた。

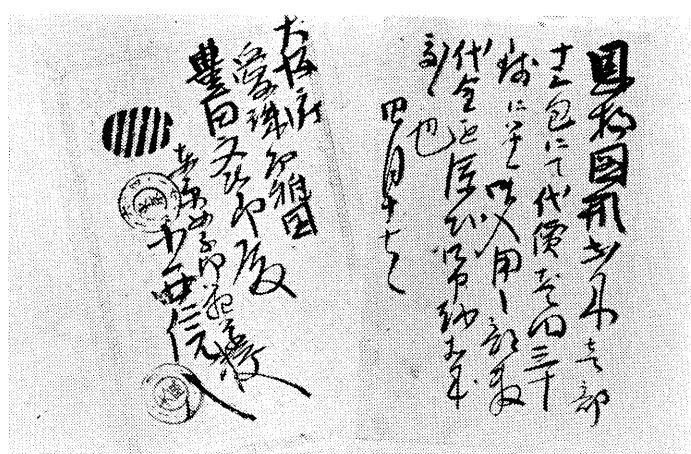
五月雨の、降るもいとわじ、おさな子の、教えの園を開き
ける。けふは、十とせの周りきて、栄え栄ゆる梅が枝の、
珠とし愛づる実を結び、文の林に、名をや立つらん。

と、追憶の念は、東西呼応して、よく歌に表れ、全く劳苦の結晶とも云うべき愛珠の生い立ちであった。滝山氏は、なお次のような感想文を残している。"噫月日は流水の如く、本園設立以来、茲に拾星箱、今や当府下を始め、近府県町村に、数多の幼稚園を見るは、斯道のため大いに慶賀する所、本園の既往に鑒み、今昔の感に堪えざるなり"。と、同志の悲願が、一果一果実を結んで、増してゆく姿を見て、決心に堪えなかつたであろうと推察するのである。

保母に対しては、保母は幼児を教育するものなれば、その言動の総ては、幼児の模範とならねばならぬと云つて、区内に居住する、良家の教養ある子供の中から、志望者を選び、当時大阪府下に唯一つの、府立模範幼稚園に、町費を給与

し、保育法伝習生として依托した。模範幼稚園には、氏原鋸先生や、木村末先生が居られて、依托生山片曾子・異勢以の両氏を、懇切に指導せられ、翌十三年三月に、保育伝習済の証書を授与されて、帰つて來たのである。其の後開園の準備も整つて、初任保母として、改めて勤務を命ぜられたが、模範幼稚園で共に伝習を受けた福尾菊子氏も、採用せられたので、六月一日の開園式には三人が幼児を引連れて列席したのである。

少し余談に移るが、氏原鋸先生は、令妹の膳真規子先生と共に、大阪府下に於ける幼稚園開拓者とも云うべき人にて、共に保育發展に及ぼした力は、多大であった。又、木村末先生も熱心に事業に当られた事と、推察することが出来る。即ち、現在愛珠に残されている、古文獻の中、閔信三先生の作られた、幼稚園の設置基準とも云うべき、『幼稚園創立法(完)』が残されているが、これは出版されずに終つてゐるから、伝習生はど



小西先生より保育材料についてお問合せの葉書

書は自分も知られたものであつた。思うに出版せられなかつたから、写本した以外には、知られなかつた文献であつて、木村先生が学究の人であつたればこそ、現在迄この書籍

を愛珠に残すことが出来たのであって、今愛珠には閔先生から送られたものと、それを又、写本した物の二部をのこしている。

幼稚園監事と云つて、園長の役を司っている、創設委員の滝山・豊田両氏は、実業家であつて、教育専門家ではなかつたから、専門の保育者を、お茶の水東京女子師範学校の卒業生中に求めて、その推薦を小西信八先生に依頼したことは、前出の通りであるが、その初代主任保母として、明治十四年九月に、長竹国子女史が赴任せられた。長竹先生は、保育修業期間の浅かった先任保母の指導と、保育の内容充実に精励し、且つ、伝習生の養成に功績を残した人で、在任四年余、此の間よく任務を全うして区内の衆望は厚く、非常におしまれて、明治十八年十一月に辞職せられたのである。

此处で特記すべき事は、保母養成の事業であつて、市内はもとより、他府県からも、給費の依托生を受けていた。年々増加する幼稚園の数に伴つて、保母の養成の必要は当然起る問題であるから、府県模範幼稚園が、廢園となつてしまつて、その頃としては、唯一の公立幼稚園として存在した愛珠に、其の機関を置かれた事も当然であったであろう。

そこで、学科と実習は本園で習得させたが、保育伝習済の証書は、試験の合格者にのみ、東区長から授与された。そして、漸次増加する幼稚園施設に、各々配属させたのである。

なお伝習生の教課は左記の通りであつて、保育の実習は本園にて習得させた。

読書（幼稚園記） 算術（四則筆算） 習字（楷書）

又、保育伝習済の証を受けるには、左記の試験に合格せねばならなかつたのである。

修身（禮行） 素読（幼稚園記） 算術（四則應用問題） 習字（楷書四字）
唱歌（彈琴） 体操、実地保育、等であつて、一科につき、五分平均、六分以上で、なければならなかつたと記録されている。

この事業は、其の後も長く続き、東区保育会の事業として、会場は愛珠幼稚園に持ち、大阪府女子師範学校長を始め、同校の教諭、其の他の専門家を聘して指導されていたから、相当権威ある保母養成機関となつた。

初代の主任保母、長竹国子先生の辞職について、其の後永く、代々の主席保母は、お茶の水女高師の卒業生にて、附属幼稚園主事の推薦にかかる者が就任し、昭和六年三月三十一日、稻葉うめ園長が退職される迄、此の事が続いたのである。

明治廿二年十月と云えば、愛珠創立後九年を数えている。其の頃には、既に確固とした經營の基礎が出来ていて、ゆるぎなき姿を、今橋三丁目井決の角に見せていたのである。此

の年、監事として創立以来尽力せられた豊田滝山両氏が、一人は国會議員として、滝山氏は東区長に撰任されたため、職を辞したので、学務員として幼稚園にも理解のあった、塩野吉兵衛氏が園長を拝命して、二代園長に就任したのである。塩野吉兵衛氏も亦、香料問屋を営み、海外に広く販途を持つた素封家であり、且つ、豊田、滝山両氏も健在であったから、よく連絡を保って前任の後を継ぎ、保育全般は主任保母に任せ、園長は専ら職員を敬愛して、其の職を樂しませ、よく施設々備の充実に勉めたのであつた。現在残されている備品の大方は、塩野園長時代に整備されたらしい物が多く、同氏は廿三カ年の久しきに涉って、在任せられたのである。

明治四十四年四月、稲葉うめ女史は、撰ばれて主席保母として着任したが、翌年、塩野園長の後を受けて、三代園長として就任することになった。稲葉うめ園長は、在職實に二十一年、其の間、大阪市内はもとより、近府県各地の保育界の中心となり、西区江戸堀幼稚園の膳真規子園長と共に、双璧となつて、幼児教育の発展推進に、努力せられたのである。稲葉園長が、漢学の素養深く、且つ、英文の読解にも堪能であつたから、原書による保育学の研究も深くて、當時誰も気付かなかつた劇遊びも、園長自身の創作や演出によつて、盛んになり、一時は愛珠の名物かの如き感があつて、わざわざ此の爲に、階段式の観覧用二階を、遊戯室に造作した程であ

つた。當時使用された本式の衣裳も美しく、今もなお昔を語つて、資料倉庫に残されている。稲葉園長は、非常に聰明な頭脳の持主にて、高い教養と、深い明哲な知慧とを持つて、滝山氏と肝膽相照し、又二代園長塩野吉兵衛氏ともよく融合共をして、園の經營に当つたから、當時愛珠は、偉彩を放つ存在であつたように私は想像する。

現在愛珠幼稚園に、可成纏つて残つてゐる明治初期からの保育資料や、宏壯な施設は、全く滝山・豊田両監事の十年間と、塩野・稲葉両園長の四十四年間の、教養高く私情ない経営努力の賜であつて、其の遺徳を、追慕するものである。根強く良く育つものは偶然に出来るものでない。見えざる劳耕の努力がよき苗を養い、これが伝統となつて、時に遇う人の心を引締め、弛む事なく先哲の心を心として、追うものであることを、七十五年の園史を通して、感じさせられるのである。

(愛珠幼稚園長)

×

×

×

×

×